Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　58　pp.23～39　2003

秋田地方におけるロシア正教の展開

持　田　行　雄

An Expansion of the Russian Orthodox Church in Akita District

MOCHIDA Yukio

は　じ　め　に

芥川龍之介に『神神の微笑』という作品がある。小品ながら，芥川が外来思想の受容に見られる日本人的な特質について深く考察した作品として有名である。そしてまた，ここに芥川が展開した「作り變へる力」に関する見解は卓見と言うべきであろう。以下に少しこの物語の跡を辿って見ることにする。

或る春の夕べ，南蠻寺の庭を歩いていたパアドレ・オルガンテイノは「頸に玉を巻いた老人」に会う。「この國の靈の一人」と名乗った老人は天主教を弘めに来ているオルガンテイノに向かって次のように語りかける。

「泥烏須(デウス) もこの國に來ては，きっと最後には負けてしまひますよ」。

「はるばるこの國に渡って來たのは，泥烏須ばかりではありません。孔子，孟子，荘子，――その外支那からは哲人たちが，何人もこの國へ渡って來ました。しかも當時はこの國が，まだ生まれたばかりだったのです。・・・。が，支那はその為に，我我を征服出來たでせうか？たとへば文字を御覧なさい。文字は我我を征服する代りに，我我の為に征服されました・・・我我が勝ったのは，文字ばかりではありません。我我の息吹きは潮風のやうに，老儒の道さへも和げました。」

「支那の哲人たちの後に來たのは，印度の王子悉達多(したあるた) です。――」「佛陀の運命も同様です」。

たまりかねてオルガンティノが口を挟む。

「今日などは侍が二三人，一度に御教に歸依しましたよ。」

「それは何人でも歸依するでせう。唯歸依したと云ふ事だけならば，この國の土人は大部分悉達多の教へに歸依してゐます。しかし我我の力と云ふのは，破壊する力ではありません。造り變へる力なのです。」

そして老人は，――

「事によると泥烏須自身も，此の國の土人に變るでせう。支那も印度も變ったのです。西洋も變らなければなりません。我我は木木の中にもゐます。浅い水の流れにもゐます。・・・寺の壁に残る夕明りにもゐます。何處にでも，又何時でもゐます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。・・・・・・」

そう言いながら夕闇の中へ姿を消して行った。と同時に寺の塔からは，眉をひそめたオルガンテイノの上へ，アヴェ・マリアの鐘が響き始めた(1)。

日本人の信徒に背教者はいない，いるのは離教者ばかりだ，とよく言われる。一旦信仰に入った者が激しい精神的な懊悩の末，たとえ地獄に堕ちようとも，自己の信念に従って，信仰の教えに背いていく，あるいは，信仰の欺瞞性に対して果敢に挑戦していくといったような背教ではなくて，むしろ，入信はしたものの何時の間にか忘れ去っている，あるいは，無意識のうちに信仰から離れてしまっているといったような離教が，日本人には圧倒的に多いとされて，その日本人的な「熱し易く冷め易い」性格が常に非難されてきた。

しかしよく聞くこの「通説」は間違っているのではないか。むしろ芥川龍之介が「造り變へる力」と呼んで喝破したような力が働いて，外来の思想や信仰を我々のうちに取り込み「何時の間にか」造り替えて，これを屈伏させてしまうのではないか。棄ててしまったり離れてしまったりするのではなく，自らのうちに取り入れて「跡形もなく」同化させてしまうのではないか。従って，それは完全に消失してしまうわけではなく，むしろ，その人物の活力となって新しく展開する働きの原動力となっていくのではないか。

無論，その新しい展開は，時に芸術であったり，文学であったり，学問であったりと，様々な形を取って表現されることであろう。しかしその人の人格となってその

Akita University

人に展開するその活力は，同化されて見えなくなったとはいえ，かつては真剣に受容された思想や信仰の働きそのものなのではないか。そしてその受容の行為そのものが真面目で真剣なものであればあるほど，むしろ，そのように言うことが出来るのではないか。

「通説」に反するこの仮説を，芥川龍之介の教示に従って，検証してみたい。無論，このような問題を一般論的に論ずることは不可能であろう。従って，ここでも特定の対象領域に思考を限定しようと思う。「秋田地方におけるロシア正教の展開」がそれである。従って，本小論では，秋田地方に展開されたロシア正教の布教の歴史を解明することが目指されているわけではない。むしろ，正教徒となって活躍した秋田地方の信徒達が生きて残した証しのうちに，どのような信仰の働き（あるいは痕跡）を見て取ることが出来るのか。その倫理的な考察が目指されている。すなわち，問題は決して歴史学的なものではなく，優れて倫理学的なものなのである。そして，無論，今回もまた「倫理的実在論」の立場からの考察である。本小論はその限定を負いつつ進められよう。

1

武藤鉄城氏が『秋田切支丹研究』（昭和55年，翠楊社）の中で（2），「金を授くるマリヤ・キリスト絵像」という面白い話を伝えている。それによると ——

「雲沢村下延字竹市の藤原藤一郎（治右衛門家）家に，基督を抱く聖母の絵像がある」という。そして，この「絵像」の由来を次のように説明する。

明治初年，いつも目の悪い治右エ門という人が自分の家で寺子屋を開いていた。

子供達へはお膳の上に抹香を敷き，指で手習いをさせ，一般へは百姓往来，商売往来等を教え，それ以上の者へは論語・中庸等を講じていた。

この治右衛門にフミという唄コの上手な娘が居り，この娘に横沢村国見から仁吉郎という大工を婿に貰った。

仁吉郎は「何を感じてか」，フミと共に明治四年に北海道へ渡り，二，三年居て戻って来た。渡島は二十一歳の時だったという。

そして帰郷の際，仁吉郎は不思議な絵像を持って帰って来た。「金が欲しい時，それを拝めば必ず授かる」という絵像である。

そこで早速，仏壇にあった阿弥陀様や，その上の神棚の御室等を叩き壊して川に流し，その代わりにその絵像を安置して，礼拝した。

「現主（3），藤一郎氏の御話によると」，まず太陽を拝み，それから何か長い呪文を唱えて，絵像を礼拝したものであるという。

寺子屋に通って来た子供達は仏壇の前の板の間を踏むと，その神様の目玉がクルクル廻って動くと言って恐がったということだが，「キリストの顔はロシアの小児の様に，目玉がキロキロしているので，油絵など見たことのない田舎の人達には，生きて動いて見えたことであろう」と鉄城氏は推測している。

氏は更に次のようにも推測する。

「明治四年といえば，未だ禁教解放令の出ない時であり，たとえそれは天主教でなく，ギリシャ教であったかも知れないが，矢張り耶蘇は耶蘇である故，すぐ内地へ持って来て礼拝したら，相当物議を醸したであろう。」

しかし「禁教に怯えていても，人々はその御本尊など見たことも拝んだこともない故，どんなものとも知らず，仁吉郎が堂々とそれを持って来ても，不思議な神様を拝んでいるとしか考えなかったらしい。」

そして鉄城氏が昭和八年の夏に訪れるまで「同家の人達は勿論，寺子屋へ通ったことのある老人達も，唯仏壇に不思議な神様があるとばかり語り，それが聖母基督の像であると気付かないというより，寧ろわからなかった」という。

仁吉郎がこの絵像を北海道で誰から譲り受けたのかははっきりしない。大工の仕事をしにいったロシア人から直接受けたものでもあろうか。もし譲り受けたとしたならば，相当高い金を支払ったか，大工仕事の手間賃と棒引きにしたものであろう。

仁吉郎は，絵像を入手した時に伝授されたものかどうか判らないが，不思議な術を知っていたという。

「現主」のまだ若い頃，藤原長太郎の娘ミヨ（8歳）が危篤だというので仁吉郎を迎えに来た。仁吉郎はその家に行き，「紙で何か呪をした」が，その紙は，娘がまだ息のあるうちは，しきりに踊るように跳ねていて，やがて娘が息を引き取ると，メタメタと力なく延びてしまったというのである。

ト正月・ト二月・ト三月

仁吉郎はまたよく歯痛を癒してやったりもした。その方法は，病人の頬を柱に付けさせ，柱と頬との間に左記のように書いた半紙を二寸四方程に折り畳んで挟めさせ，「正月二月三月」という風に唱えて，やがて「よしよし離れてくれ」と病人を柱から離れ去らせると不思議に歯痛が治っているものであったそうである。

仁吉郎は大正4（1915）年に死んだ（4）。

2

なお，本書の175頁には「藤原仁吉郎の信仰したキリストとマリヤ像」と題してこの絵像の写真が掲載されている。かなり不鮮明な写真ではあるが，全体の構図から

Akita University

見て，これは明らかにギリシア正教が用いるイコンである（5）。しかも多分「ホデゲトリア型」と呼ばれるタイプのイコンであろう。（下の写真参照）。

「ホデゲトリア」の名称は「道を導く者」（導引女）の意味を持つが，その名の由来は不明である。一般には，聖母が右手を胸に置き（その指先は幼児を救い主として指し示している），左手で幼児イエスを抱く立像として描かれる。幼児は右手を上げて祝福し，左手に律法の書（聖書）を持つ場合が多い。この型のイコンは様々なヴァリエーションを持つが，広く世界に普及して，聖母子像としては最も数多く描かれているものである。

藤原仁吉郎の信仰したキリストとマリヤ像

写真に見る限り，仁吉郎がもたらした絵像はまさにこのタイプのイコンである。

更に，この絵像を正教のイコンと特定してよい幾つかの特徴も見られるので，次にそれらを鉄城氏の記録に従って確かめてみよう。

第一に，この絵像は「縦一九．五センチ，横一五センチの色刷」で，「それを金縁額面の板へ張り付けたもの」であり，更にそれを「鞘箱を作って入れて置いたので，額はあまり煤けもせずにいる」という（6）。

もしそうであるならば，仁吉郎の絵像は，携帯用のイコンであった可能性が強い。

事実，ギリシア正教会の信徒は，単に教会堂の内部にイコンを飾って「崇敬する」ばかりでなく，自分の家の中にも飾り付け，いつもこれを拝み，更には，旅行の時なども必ず携帯用のイコンを持参して，旅館の部屋等に展示し，朝晩の崇敬を怠らないのが普通である。

従って，無論，一般の人が正教信徒の家庭からイコンを入手する場合には，携帯用のイコンが最も容易であったことであろう。仁吉郎の絵像も，その大きさや鞘箱に入れてあったという点などから，これを携帯用のイコンと見るのが最も至当なのではなかろうか。

無論，何処かの信徒の家庭内に安置されて，用いられていたものと考えることも出来ないわけではない。

とまれ，当時の北海道で正教のイコンが容易に入手できるよう一般に市販されていたというような記録は見当らない。また，明治四年といえば，未だ切支丹の禁教令下にあった（禁教令の撤去は明治六年のことである）。従って，入手は多分，正教徒から直接こっそりと仁吉郎に対して行なわれたものと考えるべきであろう。

第二に，この絵像が張ってある板は「割に厚く一センチ半もあり，歪まぬ様に二センチ幅の横木を二本通して」あり，「縁は今日のものの様に下地に石膏を置き，それへ金粉を置いてある」という（7）。

古来，イコンの板（支持体）は，絵画の保存状態を左右するため，堅さと安定性が大事とされ，堅い木の詰め木によって板の裏側を補強するのが一般的であった。具体的には長方形の板を縦に二枚合わせ，その裏側に横木を当てて，一枚板のようにする。そして板の表には2乃至5センチ幅の枠を残して数ミリの深さの凹みを作り，テンペラ画法などによってイコン画像を描くのが一般的であった。

また，イコンの枠取りは，一種の宝石箱のように，聖なる像を保護するためのものであり，枠それ自体が聖なる遺品を収める箱（聖遺物箱）そのものを意味していた。従って，枠の全体が極彩色に彩られたり，金粉で飾られたりするのもイコンを崇敬する心の当然の現れだったのである。

このような従来のイコンの素材や制作法等に照らして見るならば，上記の鉄城氏の記述する絵像の様態がまさにイコンそのもののヴァリエーションであることもまた首肯できることであろう。

第三に，鉄城氏は，この絵像について「絵のモデルは，明らかに露国人である。そして像の左右上にロシア文字がある」と報告している（8）。無論，前半部分のモデルが露国人であるというのは鉄城氏の即断である。写真で見る限り，聖母子の容貌にロシア人的な特徴が識別できるほどのものは何も描かれていない。

一般的に見ても，イコンは時間の流れや侵食に耐えなければならないから，特定の民族や種族の風貌を特徴とするような人物像は描かれないことになっている。イコンに自己を現す人物達はすべて既に神の国に住する者達なのである。

従って，イコンの本質的な意味から考えても，単に一見しただけで「明らかに露国人である」などと断定できるようなことはまず無いと言ってよいだろう。

しかし鉄城氏の後半部分にいう「像の左右上にロシア文字がある」という証言は，まさにこれこそイコンの特徴を示すものである。

一般の絵画の場合，画面に文字を書き加えることは先ずないと言ってよい。しかし，イコンの場合，描かれる人物の頭上近くにその人物の名前もしくは名前の頭文字が，ロシア正教の場合はロシア語によって，あるいは，ギリシア正教の場合にはギリシア語によって，書き加えられるのがむしろ普通である。例えば，キリストの場合

Akita University

「ＩＣ　ＸＣ」（イエス・キリスト），また聖母マリア（テオトコス）の場合には「ＭＰ　ΘＹ」（神の母）というようにである。

無論，このイコンの銘文（インスクリプション）は，そのイコンが描かれたり崇敬されたりする国の国語によって表記される場合もある。例えば，日本最初の女流聖画像画家山下りんの作品の中には日本語の銘文を持つイコンも少なくない。

何処の国の言語によって表現されようと，銘文自体はその人物に本質的に結びつき，イコンに神的なものの臨在を与えるものとして，イコンそのものを神聖なものに変え，時には悪に対する力強い武器ともなるものであると信じられている。

従って，銘文は必ずしも名前もしくは名前の頭文字ばかりでなく，土地柄との関連でその地方の言語によって様々な名称が付け加えられる場合もある。例えば，イコン画家のためにアトス山で作られた手本帖には，次のような一連の名称が勧められている。

①キリストに関しては，「全能者，救世主，生命の源，慈悲深き者，インマヌエル（神は我等と共に在り），栄光の主」等々であり，②神の母（聖母マリア）に関しては，「ホデゲトリアの聖母（導く者の意），天使達の女王，全ての人の喜び，悲しむ者達の慰め，優しき聖女」等々である（9）。

但し，成立年代の古いイコン等では，これらの銘文は消失してしまっていて，ほとんど読み取れなくなっている場合も多い。

仁吉郎の絵像にあったという像の左右上のロシア文字が果たしてこのイコンに特有な銘文であったかどうかは，残念ながら，画像が不鮮明なために判断できない。しかしその可能性は十分に高いと言ってよいだろう。

3

以上，これまでの考察から見て，仁吉郎が秋田地方にもたらした絵像は，ロシア正教会の使用するイコンであったと断定して先ず間違いないものと思われるが，しかし，一つだけ気掛かりなことがある。鉄城氏の紹介文に「光輪」に関する言及が何もないという点である。写真を見ても「光輪」が描かれていたかどうかは判別できない。

「光輪」はイコンに描かれるほとんど全ての人物の頭部の背後に必ず書き加えられる光の輪であり，それは，その人物を通して天上の国から地上の国へと神の救いの光が射して来ていることを意味する。従って，この「光輪」が描かれてあるか無いかは，一般の絵画と正教のイコンとを判別する重要な特徴の一つになっている。

一般には，その人物の頭部の背後に金色に輝く光の輪が描かれるに過ぎないが，キリスト像の場合は特別である。「光輪」の中に太い十字架が描かれ，その縦棒の上の部分の中に「Ｏ」，そして横棒の左の部分の中に「Ω」，右の部分の中に「Ｎ」が書き込まれる。この「Ｏ　ΩＮ（ホ，オーン）」すなわち「われはありてあるもの」は，キリスト自身がユダヤ教のヤーウェ神以来の神そのものであることを意味する（創世記 3:14）。そしてこれこそまさに「とこしえにキリストの名」「世々にキリストの名」（同 3:15）なのであり，この名の中にキリストは臨在して働き，人々に神の力と祝福を与えるのである。

もっとも，イコンにとってこの「光輪」がどれほど大切なものであれ，長い年月を経るうちに薄らぎ，遂には識別できないほどに消失してしまう場合も決して少なくない。現存するイコンの中には古くなればなるほど，判別できなくなっているイコンの方がむしろ多く見受けられるようである。

そして，イコンを修復できる資格を持つ者が正教会の中に極めて少ないことや，修復には極めて高い特殊な技能が要求されることなどから，教会内で大切に用いられているイコンでさえも，修復されないまま現在に至っている場合が多いのである。

このような事情は百数十年前の北海道においても同様であったと考えられる。否，むしろ当時の方がその条件ははるかに厳しかったのではなかろうか。イコンを修復できる技術や資格を持つ人がほとんどいなかったと考えることの方がより当時の現実に近いことであろう。

もしそうであるならば，長い間使用され続けてきたために，「光輪」の消失してしまったロシア正教のイコンを仁吉郎が入手したということも十分に考えられることなのである。

無論，全くの非信徒が正規のイコンを模写して，その際に「光輪」を省いてしまったイコンの模造品を仁吉郎が持ち帰ったということも考えられないわけではないが，しかし鉄城氏が紹介するように，これが「霊験あらたかな」絵像であると信じられていたという点から考えると，教会などの媒介を経ずに，単なる普通の珍しい一般的な絵画として仁吉郎の手に渡ったものであるとはやはり考えにくいであろう。

とまれ，仁吉郎が持ち帰った絵像が本当にロシア正教会のイコンであったとしても，なお，これを以て，記録に残る限り，秋田地方にハリストス正教がもたらされた最初の出来事であったと考えることは出来ない。それはこの絵像が極めて東洋風の呪術的な取り扱いを受けていたという事実からも容易にうなずけることである。鉄城氏が伝える報告の中に，ロシア正教の信仰を思わせるような何かを見出だすことはほとんど不可能だからである。

従って，仁吉郎がイコンらしい絵像を秋田にもたらし，

Akita University

これに呪術まがいの信仰を与えていたという事実は，ロシア正教が秋田地方に知られるようになった最初期の出来事であったということではなくて，むしろ，目新しい外来の宗教信仰を当時の日本人が，どのように受け入れて来ていたかを示す格好の資料として取り扱われるべき出来事なのではあるまいか。あの芥川龍之介の語る「造り變へる力」が働いて残された一つの結果としてみなすべきなのかも知れない。それにしても，あまりにも見事な「造り變へ」であったと言ってよい。おそらく，これは我々日本人とは誰であったか，また誰であるかを知る手掛かりを与えてくれる最も貴重な出来事の一例なのかも知れない。

この問題をもう少し深く考えてみたい。そこで次には，秋田地方にロシア正教がいつ頃どのようにして伝えられるようになったかを，特に大湯（鹿角市）地方への伝播を中心に考えながら，この問題を掘り下げていくことにする。

4

伊多波英夫氏によれば，秋田県におけるキリスト教の始まりは「明治十六年，仏人ベルリオーズ司祭によって秋田市楢山表町に設けられた天主公教会」であったとされているという(10)。無論，教会の設立ということではなく，個人がキリスト教信仰に触れたということであるならば，そしてまた，ここに云う「キリスト教」の中にロシア正教をも含めるならば，この時期はもっとずっと早くなるはずである。

例えば，既に明治6(1873)年に箱館においてハリストス教の教えを聞いて，領洗（受洗）した者の中に秋田人の西村長吉（イヲアン）がいる。長吉は故郷の大館にいた頃，ニコライ司祭に日本語を教えた木村謙齋から正教のことを聞いていたので，箱館の小山萬次郎（会津の人）方に至り，試みにハリストス教の講義を聴聞した。この時，パウエル田手によって神の存在や世界開闢のことを聞き，その真理を認めて遂に領洗したという。その後，長吉の実父も領洗したが，そのことが妻の実父の太田某に知られることとなり，怒った太田は「信仰を棄てざれば，其妻を去るべし」と棄教を迫り，遂に妻を自家に引き取ってしまった。しかし，長吉は「假令其妻を去るも正教に反く能はず」として遂にその妻を離縁してしまったというのである(11)。

イヲアン西村のその後の消息については不明であるが，彼が秋田の人としては最も初期のハリストス正教信徒の一人であったことは間違いないであろう。しかも彼は，仁吉郎などと異なり，明らかに自覚的な信徒，すなわち教義や信仰の内容をある程度は弁えた信徒であった。と同時にまた，外来の信仰が日本の風土に同化し土着化していく過程において必然的に生じる様々な確執や苦難をも十分に体験した信徒でもあった。しかしこれは秋田からは程遠い箱館での出来事である。従って，秋田地方への伝道の魁とみなすことは出来ない。

『花矢大館地方史』の明治13(1880)年の項には「是頃ギリシア正教鹿角を中心に伝道される」とあり，続いて明治18(1885)年の項に「是頃ギリシア正教信者十数軒を数える（花矢大館地方）」と出ている(12)。

明治十年代に入ってから，急速に日本ハリストス正教の教線が大館地方を中心に拡大していることが知られるのである。

この教線の拡大については西村長吉のように，はっきりと個人名によっても知ることが出来るので，次に幾人かの場合について確認しておこう。(無論，この場合，教会の設立という問題はまた別の問題になるはずである)。

I．[山中祐伯]

アレクセイ山中祐伯師が，大館地方にハリストス正教（ロシア正教）の布教を行なったのは明治10(1877)年のことであった(13)。

山中祐伯は「友伯」とも，また「祐博」とも書かれているが，牛丸康夫氏をはじめ(14)すべての資料がこれら3つの名称をすべて同一人物のものとみなしており，これを疑うべき根拠も見当らないので，差し当りこの問題には触れないことにして，以後はすべて同一人物とみなし「祐伯」の表記を用いることにする。

聖名をアレクセイというこの人物の生没年は残念ながら不祥である。

明治5(1872)年，ニコライが上京し，箱館地方の伝道はアナトリイ神父に委ねられた。そして明治7(1874)年には，ペトル笹川，ペトル河田，アンドレイ小關，ロマン柴田，パウェル岡村等と共にアレクセイ山中も箱館地方の「傳教師」と定められている。

しかし，翌明治8年には，長女のウェラが永眠し，その埋葬，墓地をめぐって深刻な問題を引き起こした。当時，ハリストス正教の信徒にとって埋葬と墓地をめぐる問題は極めて深刻なものであった。その山中祐伯の長女の場合が石川喜三郎の『日本傳教誌』に記録されている。正教の信徒達が置かれていた当時の状況を極めて判り易く伝える資料でもあるので，少し長くなるがここの全文を以下に引用しておこう。

「一千八百七十五年（明治8年）の一月に，アレクセイ山中の長女ウェラ永眠したるを以て，父アレクセイ山中は官に届け，墓地を高龍寺（前に同人妻アンナを葬りたる寺）に得ん事を談じ，ハリストス教の式を以て葬るべき旨を寺僧に告げたり。寺僧は此事を官に告訴せしかば，官・アレクセイ山中を召喚し，改宗するにあらざれ

Akita University

ば，墓地を與へざる旨を告げたり。アレクセイ山中これを辨じて曰く，長女並に我等は，既に眞神を尊信し，豈異宗の埋葬式をなすを得んや，これ眞神の誡命に戻るの罪なりと。官吏曰く，果して然るか，我儕の主とする所は眞神の命に在り，もし政規に反する者あらば，他日その審判を迎かんと。然るに信徒中，アレクセイ山中に向ひ，外國人の墓地に埋葬してこの難を免るべしと勧むる者ありしも，山中はこれ日本人の為すに忍びざる所，且・日本の法律を免れんがため，外國人に頼らんとするは最も不可なりと論じ，寧ろ法律違反の處分を受くるに若かずとなし，衆信徒またこれに同意し，アナトリイ師私借の墓地に埋葬せり。アレクセイ山中はこれがために，官の調べを受けたりしも，別に處分もなく，僧侶輩はこの事件を利用して，ハリストス教に反抗せんと試みたるも，その目的を達せざりき。」(15)。

山中祐伯はアナトリイの下で酒井篤禮，鈴木富治等と共に熱心に伝道に携わり，明治10(1877)年には，秋田県北部の伝道を行い，後の曲田教会の基礎を作ったが，残念ながら，その後の消息はほとんど知られていない。

僅かに明治十一年五月三十一日の「七一雑報」が「魯會の山中氏」に関して，次のように伝えている。

「三月十六日の事とかや弘前教會の本多齋(いつき) 氏は秋田縣下羽後國大館に赴きて魯會の山中氏に邂逅し(箱館より派出せし人にて元會津産の醫生なれども近年専ら傳道に尽力(ちからをつく) し居(いる) なり) 氏は旅宿に講釋場を開きたれば聴聞人凡四百三十名も來會ありたる故二人はこれに気を得て盛かんに福道を弘布せんとせしに豈計らんや巡査の妨障(さまたげ) にあひ思ふまゝに果し得ざりけり」

そこで翌日「警察所に出頭して警部とおぼしき人と対談」したが，このような人民保護の官吏ですら「妄説に迷惑している程なれば況して人民(ひとびと) をやされば我儕はいかで黙止すべきぞといひ捨て旅宿に帰り其晩も講場を開きしに余程の聴聞人にて随分盛かんなりしとぞ」とある(16)。

無論，本多齋（1851-1945）は，弘前教會のキリスト者であり，日本キリスト教界の指導者の一人であった本多庸一の弟であるが，ここに云う「魯會の山中氏」がロシア教會の山中祐伯であることもほぼ間違いの無いところであろう。

なお，この資料は，日本における最初期の基督教伝道が，教派や分派などの対立を越えて，一致団結し，協力し合いながら布教にあたっていた事実を知ることの出来る貴重な資料でもある。

とまれ，山中祐伯は明治10年10月頃に大館地方に出張して伝道を開始し，その後一旦箱館に帰ったが，また明治11年３月頃に再び戻って来て伝道の講義に当たり，大館地方にロシア正教の種を播いたものと思われる。

なお，上記の石川喜三郎資料に見られる仏基の対立とそれに対する官の対応等は，これから考察する角館事件などにも典型的に現れてをり，極めて注目に値するものである。

Ⅱ．［小松韜蔵］

秋田地方へのハリストス正教の普及に関しては，もう一人決して忘れることの出来ない人物がいる。小松韜蔵（1842-1912）である。山中祐伯は伝教者であったが，こちらは司祭にまでなった。

小松韜蔵(トウゾウ) は旧仙台藩士，陸奥國宮城愛子の出身である。相沢源七氏によれば(17)「仙台の小野荘五郎宅で同藩の知人らが正教を学ぼうと話しているのを聞き」志願して明治４(1871)年に箱館に渡ったという。そして米国船で密航を企てたが果たせず，開拓使庁開拓学校の使用人になって澤邊琢磨らと相識るようになる。やがて影田孫一郎にニコライを紹介され，開拓学校に入学して受洗。聖名をティトといった。

ニコライから教育を受け，箱館で福音を宣べ伝えたが，明治５年にはニコライに伴われて小野荘五郎と共に上京し，麹町（山手）教会の設立に参与する。そして翌年から山形県や静岡県伊豆地方等に伝道を行い，司祭になってからは函館教会を管轄（82-91）し，しばしば青森，大館，鹿角，久保田（秋田）地方を巡回した。また稚内，利尻，礼文，釧路，根室，南千島にまで足跡を印してもいる。

なお，このティト小松司祭の伝道業績についても『日本正教傳道誌』が次のように伝えている(18)。

「又秋田地方に教會の起りたる當初も，他より同地方を管轄するの便を得ざりしかば，ティト小松司祭は同じく此地方を管轄せられ，屡々津輕海峡を経て青森に渡り，大館を経て鹿角，久保田地方に巡廻せられたり。故に當時小松師父は北海道の北端より，内地の羽州を管轄せられて，東奔西走その辛勞もとより筆紙の盡す所にあらざりき」と。

秋田地方にどのようなルートを辿ってハリストス正教が伝えられたかという問題は，しばしば論争されているところであるが，この資料で見る限り，函館，青森，大館，鹿角，久保田のルートが一般的であったように思われる。

とまれ，小松韜蔵が秋田地方におけるハリストス正教の展開に極めて重要な役割を担っていたことは上記の資料等によってよく理解されるところであろう。

5

伝教者山中祐伯や小松韜蔵司祭等の活躍によって秋田

Akita University

地方にもハリストス正教の布教が行なわれるようになったとして，なお，秋田地方に，その名を後世に留め得たような秋田出身のハリストス正教徒が活躍し始めるのは，一体いつ頃からのことであろうか。

無論，明治4年の仁吉郎は論外として，明治6年に領洗した西村長吉も，たとえ故郷が大館であったとしても，その活躍は多分函館が中心であったから，これもまた秋田地方において活躍した最初の信徒であったとは言い難いであろう。

Ⅲ．［目時金吾］

一般的には，鉱山地帯だった秋田地方は隠れ切支丹が身を潜めるのに格好の土地柄であった。そうした歴史的な背景・土壌を受けて，「函館から最初にニコライの教えを県北地方にもたらした」のは十和田湖岸七滝村の目時金吾であったと云われている(19)。

目時金吾（1864-1940）は，その活動の範囲から見て，これからここに登場する人物の誰よりも比較的ポピュラーである。以下に『秋田人名大事典』(20)や『日本キリスト教歴史大事典』における岩間正光氏の紹介文(21)等を頼りに，多少の私見と考察を加えながら，その生涯について簡単にまとめておこう。

目時金吾は陸奥國鹿角郡七滝村荒谷の士族出身である。元治元年に生まれた。初め医師を志して箱館に渡ったが，酒井篤禮の感化で宣教師ニコライの説教を聞き，明治11(1878)年に受洗する。この時の立会人が当時まだ箱館にいた伝教者の山中祐伯であった。そして3年後には東京神田の正教神学校に入学する。「人の病を癒す医学よりも人間の精神を救う宗教家の道を進もう」というのがその入学の動機だったという。

神学校の同期生には小西増太郎や金須嘉之進等がいる。

卒業後は伝教者として各地に布教し，明治36(1903)年には司祭に叙聖される。翌年，日露戦争が勃発した。日本正教会はこの時，ロシア軍将兵の捕虜に宗教的慰めと聖務を行なったが，目時も福岡捕虜収容所付司祭に任ぜられ，大里や小倉の収容所までも含めて活躍している。

司祭として前橋，横浜，函館の正教会を経てから，大正2(1913)年に，京都正教会に転任する。多年ここの管轄司祭であった三井道郎が東京本会に移った後任として京都正教会管轄となったのである。

また教会附属の京都正教女学校で，聖書，教義，教会史等の講義を担当し，校長も兼任した。京都大学のロシア語講座の講師にも迎えられている。

昭和6(1931)年には病気による辞任が認められて郷里に戻り，病気静養中であったが，昭和10(1935)年から15(1940)年まで秋田地方の臨時管轄を委託されて，ハリストス正教の普及に努めた。また，長年の功績が認められて長司祭の称号が贈られている。

明治後期，秋田県キリスト教会の中で，大湯の正教会が県内第一位の信徒数を占めたのは（後述），この目時と彼の信仰を継承した千葉佐惚治等の活躍によるものである(22)。

Ⅳ．［千葉佐惚治］

千葉佐惚治（1858-1930）は，陸奥國鹿角郡大湯に生まれた(23)。祖父の十郎は戸田一刀流の達人であったという。佐惚治は，明治10(1868)年の西南戦争の時に新選旅団編成の巡査募集に応じて上京し，乱平定の後に帰郷した。当時はまだ19歳で，大湯45人の一行中，最年少であったという。

諏訪富多氏はこの間の事情を次のように伝えている。

「大湯の隊士は宮城吹上御苑に謁見を賜り明日戦地に出発という時に，戦は終わったという報告が来て，東京を見物して帰国したということです。後に大湯キリスト教信者の大先覚となった千葉佐惚治（温郷先生）は二十歳で隊士の最年少者であったといいます」(24)。

帰国後，佐惚治はやがて七滝村の目時金吾から信仰を継承して，明治13(1880)年5月には川股（酒井）篤禮より洗礼を受けた。聖名は「テモフィ」である。

佐惚治は郷里にあって，大湯小学校の教員を務める傍ら熱心に正教を伝道し，後に彼の後継者格になる浅井末吉（小魚）等を信仰に導いている。

後年は村議，郡議等も歴任した。

佐惚治はまた「温郷」と号して俳人としても活躍した。

諏訪富多氏が佐惚治の俳句に関する考えを紹介して次のように語っている。

「千葉先生は大湯キリスト教の大先輩でありますが，政治産業方面にも大湯にとっては偉大な功績を残されたのです。今ここには俳句についての先生の御考を紹介しておくことにとどめます。その句の序文に，「余俳名を温郷と称し，自ら師なく独り至上者の仁慈と聖知を賛美し，静かに宇宙に遊ばんと，気に浮かべるままに俳句を作りて自ら楽しむ」大正十年一月始め句を作るとあります。もっともそれ以前に先生の和歌もあります。私（諏訪富多）の母の伝うるものによりますと，

釜の湯のにえ立つ庵の軒ばには
　　よの塵はらふ松風ぞ吹く

というものを私は記憶しております」(25)。

なお，関東学院長になった坂田佑もこの千葉佐惚治の教え子である。

Ⅴ．［坂田佑］

坂田佑（1878-1969）は，関東学院の創立者である。先祖は会津藩士だったが戊辰戦争に敗れ，両親の時に大湯（現鹿角市）に移っている。佑は大湯で明治11年2月に中村富蔵の次男として生まれた。

大湯小学校に入学し，千葉佐惚治の薫陶を受けたが，

Akita University

家が貧しかったので満足な教育も受けられず，不老倉鉱山で働いている。明治31(1898)年，徴兵検査の時，陸軍教導団の募集に応募して入団し，成績が良かったので選抜されて陸軍騎兵学校に進み，恩賜の銀時計で卒業した。

明治39(1906)年に足尾町の坂田チエと結婚して坂田の姓を名乗る。

明治40(1907)年には東京学院四年の編入試験に合格，更に第一高等学校に進んだ。

内村鑑三の門下に入ったのもこの頃のことである。

明治45(1912)年には宿望の東大文科に入学し，哲学と宗教科を専攻した。卒業した時には既に34歳になっていた。

大正8(1919)に横浜に関東学院を創設して学院長になり，昭和24(1949)年には関東学院大学長となった。

神奈川県文化賞，勲三等を受け，米国のレットランド大学からは人文学博士の学位を贈られている。

昭和44(1969)年，横浜市の自宅で90歳の天寿を全うした。

著書に『恩寵の生涯』がある(26)。

坂田佑は千葉佐惚治の教えを受けたが，しかしハリストス正教徒にはならなかった。

VI. ［浅井末吉］

大湯小学校訓導時代の千葉佐惚治から薫陶を受け，その信仰を継承して，名実共に佐惚治の後継者格と目されている人物は，むしろ浅井末吉（1875-1947）である。

浅井末吉は明治8年，大湯丁内の瀬川家に生まれた。明治29(1896)年に中町の浅井家に養子に入る。

10歳から大湯小学校訓導千葉佐惚治の影響を受け，ロシア正教の熱心な信者となり，明治24(1891)年に山村雄五郎から洗礼を受け，36年には教理研究のため上京，駿河台の伝教学校に入学する。

帰郷後は鍛冶職を生業としながら，大湯ハリストス正教説教所の管理者となって鹿角地方の布教に努めた。また郷土の因習刷新に情熱を注いでいる。

更に俳句を好み，小魚と号して「薊会」を主催する傍ら「ホトトギス」にしばしば入選して俳人としての地歩を築いてもいる。秋田に小魚ありと，地元よりもむしろ中央でその名が知られるようになり，正岡子規とも親交があったという。

俳人小魚に注目して訪れる著名人も多く，石井露月，荻原井泉水，大町桂月等の著名人が訪ねて来て，俳句や文学について論談を交えたとも伝えられている。明治39(1906)年には河東碧梧桐が東北吟遊の途中，小魚を訪ね，一夜を歓談した。また翌年には十和田湖を訪れた石井露月が帰りに大湯の小魚を訪ねている。稼業の鍛冶をやっていた小魚は喜んで早速屋外の林檎を取って来て，その場で二人は林檎をかじりながら文学の話にふけったという。この時，露月は，

「相逢ふて相語る林檎紅ゐに」

の句を残した。

大正元年には荻原井泉水が十和田湖を訪れて小魚から案内を受けている。井泉水と云えば「季題無用」の説や「一句一律」の説などを唱えた俳人として有名であるが，井泉水がこれらの考えに思い至ったきっかけを作ったのは，この時の小魚の井泉水に教えを請うた言葉であったという。

小魚は大正期に入ると更に「凍雲会」を興して指導者となり，俳句を広く地方にまで広げようと努めた。

また南部藩の歴史を研究し，『秋田南部国境争論』や『境界提要』等，百五十種の著書を残している。晩年は鹿角全域にわたる郷土史料の蒐集と調査に当たった。このノート二百冊にも及ぶ厖大な文献整理は「浅井史料」として今も高く評価され，その一部は『秋田県史資料編』にも収録され，後進に郷土史の貴重な資料として多く利用されている。

しかし浅井末吉の最大の功績は，先ず何よりも国の特別史跡に指定された大湯環状列石遺蹟を発掘し，その保存に努力したことである。現在では国際的に有名になっているこの遺蹟は昭和7(1932)年12月12日，浅井末吉によって発見された。耕地整理の作業中，水路の中に石群があるのを見付け，環状石籬の一種ではないかと考えたのが発見のきっかけであったという。

大湯環状列石遺蹟は終戦後，昭和26，27年に国の文化財保護委員会による発掘が行なわれ，その精密な調査が発表されている。この遺蹟の発掘と保存は戦後日本考古学会の画期的な収穫と言われ，また先住民族の行方の探求に情熱を燃やした浅井末吉や大湯郷土研究会の人々の苦心と努力の結果であったとして高く評価されている。

浅井末吉は昭和22(1947)年に没したが，昭和37(1962)年には，大湯大円寺境内の天然記念物に指定されている「門杉」の樹下に句碑が建てられた(27)。

「秋立つや大樹の梢おのづから」

6

『秋田県史　五巻』（昭和五十二年発行）の［明治末期に於ける縣内基督教會一覧」によると(28)，鹿角郡大湯村の日本ハリストス正教会は信者数が166名あり，信者数第二位の秋田基督教會（秋田市本町四丁目）の59名を断然引き離して，全県総数12教會のうち，最大の信者数を誇る盛況ぶりであった（次頁の表を参照）。

更にまた，この「一覧」には，その盛況ぶりを示す次のような［註］記も見えている(29)。

「明治四十二年九月本縣は右の中多數信者をもつ秋田

Akita University

基督教會と鹿角郡大湯村日本ハリストス教會に對し信者中聖饗を受くる資格者の報告を求めたるに，次の如き回答あり。

秋田基督教會　　八二名

日本ハリストス正教會　　一四三名」

因みに，同じハリストス正教會の他の三ヶ所（①増田町，②十二所町，③秋田市）の信者数が，①13名，②42名，③35名であるのと比較してみると，大湯村の信者数166名が，如何に群を抜いたものであるかがよく理解されよう。

［明治末期に於ける縣内基督教會一覧］

教會名	所在地	信者数
秋田基督教會	秋田市本町四丁目	五九
天主公教會	秋田市古川堀反町	
聖救主教會	秋田市保戸野愛宕町	三四
日本ハリストス正教會	鹿角郡大湯村	一六六
ハリストス正教會	平鹿郡増田町	一三
日本メソジスト秋田教會	秋田市上長町	二五
ハリストス正教會	北秋田郡十二所町字曲田	四二
基督教會講義所	由利郡本荘町東町	一七
ハリストス正教會	秋田市龜ノ丁堀反町	三五
秋田ユニヴァサリスト教會	秋田市保戸野中丁	二七
秋田日本基督教會	秋田市東根小屋町	五二
日本聖公會大館講義所	北秋田郡大館町東大館	一六

（『秋田県史資料』明治編下六〇一、一〇七七頁）

おそらく，こうした発展は，既に見て来たように，目時金吾，千葉佐惚治，浅井末吉等の熱心な努力によるものと思われる。ここの教会は，他の教会に比して，ここで活躍した多くの人々が，信仰や布教以外の何らかの点（例えば，教育，俳諧，郷土史研究等）において，郷土史もしくは全国史にその名を留めることが出来たような優れた知識人もしくは教養人であったことに，その明らかな特徴を見て取ることが出来るのである。

Ⅶ．［高木新助］

事実，「ハリストス教を研鑽して」これを信仰し，俳人浅井小魚とは「共に啓発し合った友人同志」の高木新助（1872-1948）もまた十和田湖の開発に功績のあった大湯ではよく知られた人物である。

新助は旧会津藩士の子孫で，三戸に生まれたが，青年の頃，両親と共に大湯に転住して商業や林業等の職業を転々とした。しかし，そのような生活苦に喘ぎながらも，当時の青年達に「産業，経済，教育，政治など，新鮮な知識の教授を怠らなかった」人であり，また十和田湖が日本新三景，十勝景，避暑地三景に上位当選し，「日本八景　十和田湖　本山彦一書」の碑が発荷峠に建設されたのもこの新助の尽力によるものであったという。

そして，「心の持ち方が頗る堅」く，「決断も明快，識見も卓越」と評された高木新助の墓は，いま，大湯大円寺裏の墓地にあり，磨かれた黒い御影石に「天には栄光　地には平安」の句が刻み込まれている(30)。

無論，たとえ既に著名人であろうと教養人であろうと，このような人々の布教活動が常に順風満帆の勢いを得て伸張していったわけではあるまい。まして彼等の活躍した最初期の頃は，未だ明治６(1873)年にようやく禁教令が撤去されてから数年を経たばかりであった。外来の宗教に対する邪教観は全国的に覆うべくもなかったと言ってよいだろう。

しかし，既に山中祐伯の長女の埋葬事件において見て来たように，新しいキリスト教を危険視し，信徒に対して迫害を行なっていたのは，必ずしも政府や国家の出先機関ばかりであったわけではない。確かに，国家権力の末端機関には，中央政府からの意向や通達等が迅速かつ正確には伝達されず，また担当官達の新宗教に対する無理解等からも，信徒達にとっては極めて不幸な対策や事件が引き起こされる場合もなかったわけではない。しかし，この新しい宗教の真の迫害は，むしろ，従来の古い宗教，とりわけ仏教から来た。この仏基の対決は，特に明治時代の前半期に，多くの喜悲劇を生んでいる。そして，それは秋田地方の場合も決して例外ではなかった。

例えば，『鹿角のあゆみ』は，「ハリストス教の当時の有様」について，花輪小学校六十年誌の「明治七年四月二十日」の項に記載されている次のような証言を伝えている。すなわち「ハリストス教信者に対し，嘲りののしりを試み，暴行を加うるようの心得違い無之様注意すべき旨，郡役所より通牒せらる」というのである(31)。このような「通牒」が必要とされるほど，当時の信徒達を異端視する風潮は強かったということなのであろう。

7

明治22(1889)年に「全く耶蘇教征伐」とも云うべき仏基対決事件が角館に起きている。この事件もまた武藤鉄城氏の前掲書が伝えているが，これに類似した事件の記述は秋田の別の地方にも散見されるので，鉄城氏の記述に従いながら(32)，以下に少し詳しくこの事件を見ておくことにしよう。

明治６(1873)年に，全国のキリスト教禁制の高札が撤廃されるまで，角館では毎年の切支丹調べが終ると，隣同士や親しい者達が，「無事に済んでおめでとうござい

Akita University

ます」とあたかも年賀の祝言を述べるように挨拶し合ったという。どれほど強く宗門改のことが人々の心に懸念されていたかが理解されよう。

政府が外国の機械文明や科学技術を性急に移入し始め，信教の自由までも認めたのを見て，これを最も恐れたのは仏教徒であった。仏教徒の耶蘇教を自由に布教させることに対する恐怖や嫌悪感は，さながらその仏教が初めて日本に移入された時に，神道の信徒達が仏教に対して抱いたものと軌を一にしていたと言ってよい。あのニコライ堂があたかも皇居を俯瞰するかの如く神田駿河台に建造された時，ロシア国は事ある時，あの高楼に大砲を据え付けて宮城を砲撃するのだなどという話がまことしやかに伝えられていた時代だったのである。

更に近々開催される帝国議会に，もし耶蘇教の議員が選出されるようなことがあれば，一大事だとも危惧されていた。

こうして，大内青巒を団長とし，辰巳小次郎，佐治実然の二人を副団長とする「愛国護法大同団」は，松岡君之助，長沢達彦・則彦兄弟，中島某などという若い仏教演説家達を急先鋒として角館に派遣してきたのである。

一方，角館には明治21(1888)年の春に日本正教会の川崎恵真という伝教師が来ていた。恵真は初め福井寧という人と二人で秋田に居住していたが，一ヶ所に二人滞在するのは不利であると考え，大曲方面からの手づるを求めて，川原町の植木定静を訪ねて角館に来ていたのである。

東勝楽町の小学校前にある小滝青七の家の一室を借りて講義所としていたが，教室に出入りしていたのは，植木定静とその娘二人の他，鈴木廉治郎，赤平來治，高橋運治，竹内良吉の四人であり，彼等は秋になって共に洗礼を受けている。おそらく，角館における明治になって最初の受洗者であったろう。

また受洗はしなかったが山根方面から時々聴講に来ていた老人もいたという。

さて，角館にやって来た「仏教演説家」達は，角館の寺院の和尚達からの応援を受け，岩瀬町の佐藤家を本部として，佐藤氏と共に耶蘇宗門への対策を練った。この「佐藤氏」というのは当時アンチ・クリスチャン側の代表的な人物として知られていた人物であり，後に新潮社の初代社長となった佐藤義亮氏はこの当主の令息である。

仏教演説家達は当時としては珍しい幻燈などを映して演説会を開いたので「大いに人気を博した」という。

こうした雰囲気の中へ松田伝助という「赫顔髯面」の「蛮カラ弁士」が佐藤家を目当てに乗り込んで来る。佐藤氏はこの松田伝助に川崎伝道師と立合演説会をするよう勧誘した。

耶蘇側からも承諾の返事があり，その評判が広まると町中の人々が興奮し，今にも血の雨が降るような状態になったという。

しかしその夜，川崎氏は殺気立った会場の光景に驚き，松田氏の演説中に，随行した人々と一緒に逃げてしまい，無事に済んでいる。耶蘇側の退場は確かに仏教側の勝利を意味したが，しかしそれは宗旨の弁護による真の勝利ではなく，威嚇による勝利であった。

「川崎氏としてはいかに宣教師の身とはいえその場合勝っても負けても，結局危害を蒙ることを知っていたので，むしろ身命を全うした方がかえってデウスの意にかなうものとして涙をのんで退場したのかもしれない。いまさら殉教でもないと思ったのだろう」と，鉄城氏は川崎恵眞のために弁明している。

しかし事件はこれだけで終らなかった。耶蘇教側に大変な不幸が舞い込んで来る。神道派の某暴漢が，仏教側の勝利を妬んだのか，それとも惟神(カムナガラ) の道の威力を示そうとでも思ったのか，明治22(1889)年9月26日夜，耶蘇教講義所を焼き討ちしたのである。物置に放火したのだったが，小滝家と隣家の植田政太郎家との二棟を全焼してしまった。しかし当時警察署は放火現場の目と鼻の火除けにあったにも拘らず，犯人の検挙も出来ないほど微力であった。

川崎恵眞は，度重なる迫害に角館にはいたたまれず，とうとう退去して青森三本木に移って行く。「角館を去る時は川原町の高橋泰助という人がただ一人生保内まで見送り，悄然と仙岩峠をさして登り行く川崎氏と涙のうちに別れた」と鉄城氏は伝えている。

信者の一人であった鈴木廉次郎氏は，師の跡を追い，十二月の末，三本木に川崎師を訪ね，師の下で翌年の三月まで教理を研究したが，その後上京し，その年の九月には福井寧氏の世話で駿河台の正教伝道学校に入学し，卒業後はニコライ堂に勤務している。

しかし川崎恵眞氏はその後ついに伝道を見限ってか職を辞し，北海道に渡って，幾多の辛酸を舐めた後，釧路の幌泉の村長になった。

また，秋田で共に布教した福井寧氏は，その後，白河に移ったが，やがて北海道根室の司祭となり，次いで東京の下高井戸に居を移し，白河並びに宇都宮地方の司祭になっている。

このように「二十二年の角館キリシタン事件」を叙述した後，鉄城氏は，続けて「信教の自由が許されると同時に劈頭，耶蘇教を信じそして洗礼まで受けた人々の，その宗旨を信ずる様になった動機と禁教時代のキリシタンと何か脈絡のあるものか否か」という問題を提起されて，更にこれに答えようとされておられる(33)。ここには確かに傾聴に値する議論も展開されているが，しかし少々引用が長くなったので，その検討は後日に譲ること

Akita University

にしよう。

8

この「仏基論争」は，角舘においてばかりでなく，大湯においても，大人げない騒擾事件を引き起こしている。『鹿角のあゆみ』（前掲書）に次のような記述がある。

「明治二十年代になると，仏教が廃仏棄釈の反動から失地回復をはかるため，国民にキリスト教邪教観をあおろうとした護法運動が盛んとなり，島地黙雷，井上円了，大内青巒らの，国家主義へ傾倒したキリスト教批判運動がさかんとなった。こうした時代背景のもとに，大湯にあってもキリスト教を信仰する当時の進歩革新派の若い人々の層と，仏教を固守する保守的な人々の層との間の意見の相違が甚だしくなり，しばしば新旧思想の論争が行われたが，理論闘争に劣勢を感じた仏教派は，中央の錚々たる論客である大内青巒（尊皇奉仏大同団），加藤拙堂，石山天涯らを招いて，はしなくもここに仏基大論争が起こった。大円寺で行われた仏教大演説会は，キリスト教信者からさかんな反論や弥次が出されて騒然とした状況になり，興奮した仏教徒がキリスト教会に乱入するなどの騒動が起こった。明治三十一，二年の頃といわれ（諏訪綱俊談），全国でもあまり例のない出来事であった」(34)という。

安村二郎氏が「鹿角のギリシャ正教Ⓣ」（「秋田さきがけ」）において「中央から論客乗り込む」という小見出しの下に伝えている事件も，これであろうか。キリスト教側に対してかなり好意的な記述になっている。

「大湯には独立の教会がなく，そのころさわ（沢）の家と呼ばれた千葉家が説教所であった。ここに集まる信徒はいずれも革新的な青年たちで，中央から乗り込んできた仏教破邪阻止運動の論客石山天涯，加藤拙堂，大内青巒と，大円寺で仏基論争を展開し，一歩もひけをとらなかった。このような信念の背景には，教会の柱石だった旧会津藩士高木新助の思想的影響があったと思われる。」

そして，やがて日露戦争を契機に，ギリシャ正教は衰退におもむくが，安村氏は，以上の布教過程のなかに，「その信仰に情熱を燃やした明治の青年たちの，進取性と反骨精神を」見てとっておられるのである(35)。

ところで，後者の資料の「大湯には独立の教会がなく」という記述を信用するならば，前者の資料の「仏教徒がキリスト教会に乱入するなどの騒動」というのは間違いであろう。乱入場所は（もしそれがあったとして）せいぜい「教会」ではなくて後者の云う「説教所」というところだったろうか。

とまれ，大湯での仏基論争は，前者が「キリスト教信者からさかんな反論や弥次が出されて騒然とした状況となり」と語り，後者が「一歩もひけをとらなかった」と言い切っておられるところから推して，角舘の仏基論争の結果とはかなり異なった収穫が得られたもののようである。

一方，角舘において，騒乱の直接的な原因を作ったのは明らかに仏教側であり，それに便乗した神道側でもあった。他方，大湯においては，むしろキリスト教側が反論や弥次によって「騒然とした状況」を作り出している。この相違は大きい。事が生死を左右するような信念の情熱に関わる事柄だけに，そして，時代がまかり間違えば殉教の死をも覚悟しなければならなかったような時代であっただけに，この相違は極めて大きな相違であると言える。

しかし，同じ秋田地方のそれほど遠くない地域でありながら，同じキリスト教の布教に当たって，なぜこのような地域的な相違が生じたのだろうか。

この疑問に対して（それは極めて重要な疑問であるにも拘らず），明確な回答を与えることはできない。これに必要な資料は，残念ながら，今のところ見当らないようである。今後の調査や研究に待つ他はない。

9

明治以来「大日本正教會神品公會議事録」や「日本正教會公會議事録」あるいは単に「公會議事録」などと呼ばれてきた日本正教会編纂の公会議事録に掲載されている景況表（統計表）から，秋田県における正教会（会堂を含む）の「現員」と「戸数」とを抜き書きしてみると次の表のようになる。

秋田県の正教会（会堂をふくむ）													
明治29	大湯	秋田	曲田	大館	鷹巣	花輪	毛馬内	能代				合計	
	29	68	60	38	4	48	38	16				298	総員
明治32	大湯	秋田	曲田	大館	院内	花輪	毛馬内	能代	増田町	中山		合計	
	47	25	61	57	7	44	38	11	9	8		307	総員
	25	13	14	25	4	34	17	5	8	1		146	戸数
大正5	大湯	秋田	曲田	大館	小坂	花輪	岩ヶ崎		増田			合計	
	97	49	72	17	40	17	14		12			318	現員
	14	11	14	6	12	8	5		5			75	戸数
大正14	大湯	秋田	曲田	大館	小坂	花輪	岩崎	花岡	中山	荒川	扇田	合計	
	37	34	36	8	13	5	9	5	12	3	5	165	現員
	13	9	5	2	4	2	3	2	1	1	1	42	現戸
昭和53	北鹿											合計	
	47											47	員数
	19											19	戸数

［総員］または［現員］の増減の変動はかなり激しいが，［戸数］は明治の中期頃をピークに次第に減少して

Akita University

いて，総体的な衰退は覆うべくもない。ロシアのハリストス正教は日本に受容されると同時に急速にその教線を伸ばしながら，また，急速に衰退していったが，その急激な変化は多くの人々の関心を呼び，その原因の追求が日本思想史の最大の課題の一つになっている。しかしこのような問題については，既に僅かながら私見を発表してあるので(36)，今回は別の角度からこのような問題について考えてみたい。

日本医学の開発に貢献したドイツの内科学者エルウィン・ベルツ（Erwin Baelz : 1849-1913）は，明治34年11月22日，日本在留25周年を記念する祝典において，日本の将来に対する忠告を行なっている。その忠告は要約すると次のようになろうか。

西洋の科学の起源と本質に関して日本ではしばしば間違った見解が行なわれている。人々はこの科学を年にこれこれだけの仕事をする機械であり，どこか他の場所へたやすく運んで，そこで仕事をさせることのできる機械であると考えている。しかしこれは誤りである。西洋の科学の世界は決して機械ではなく，一つの有機体であり，その成長には他のすべての有機体と同様に一定の気候，一定の大気が必要なのである。

地球の大気が無限の時間の結果であるように，西洋の精神的大気もまた，自然の探求，世界のなぞの究明を目指して幾多の傑出した人々が数千年にわたって努力した結果である。

西洋各国は諸君（日本人）に教師を送った。これらの教師は熱心にこの（科学の）精神を日本に植え付け，これを日本国民自身のものたらしめようとした。しかしかれらの使命はしばしば誤解された。もともとかれらは科学の樹を育てる人たるべきであり，またそうなろうと思っていたのに，かれらは科学の果実を切り売りする人として取り扱われたのだった。かれらは種を播き，その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのであって，その樹たるや，正しく育てられた場合，絶えず新しい，しかもますます美しい実を結ぶものであるにも拘らず，日本では今の科学の『成果』のみをかれらから受け取ろうとした。この最新の成果をかれらから引き継ぐだけで満足し，この成果をもたらした精神を学ぼうとしないのである(37)。

このようにベルツは，日本人が自身で科学を生み出し得るようになるためには，科学の精神をわが物とせねばならないと，日本の将来に対する忠告を語っている。

これが内村鑑三ともなると，「西洋科学の精神」は端的にキリスト教信仰そのものにある。内村は西洋のキリスト教文明を取り入れながら，その文明の根本であり，起因であり，精神であり，生命でもあるキリスト教信仰そのものを受容していない点に「日本国の大困難」を見て取っている。

内村は次のように語る。

西洋の「基督教的文明は・・・基督教に由て起つた文明」であり，「基督教なくしては起らなかった文明」であります。「然るに日本人は基督教的文明を採用して其根本たり，其起因たり，其精神たり，生命たる基督教其者を採用しない」のであります，「是れが我国今日の凡ての困難の根本」であります。「基督教なしの基督教的文明は是れは之れ終には日本国を滅ぼすもの」であります。「故に我等の今日為すべきことは何んでありませうか」。「今より直に進んで西洋文明の神髄なる基督教其物を採用するのみであります」(38)。

内村がこのように日本の将来に対して警告を与える姿には，さながら愛児を叱る厳父の眼差しがある。内村はまさにその慈愛の眼差しをもって，やがて日本に全く新しい，しかも極めて日本人的な「無教会」主義的キリスト教の立場を確立していく。ここにおいてもまた，あの芥川龍之介が指摘した「造り變へる力」が働いて，日本に独自のキリスト教的精神を形成したと言ってよいだろう。

もっともこの内村鑑三のような自覚的な事例は極めて稀であって，一般には，もっと無自覚的に（言わば知らず知らずのうちに）外来思想や信仰に対して「造り變へる力」が働き，その結果はそれと判別し難いような形を取って現象して来る場合の方がはるかに多かったのではなかろうか。筆者はそれを上掲の目時金吾から高木新助に至る大湯地方の知識人達の教育，俳諧そして郷土史研究などの活躍に見る。宣教師ニコライによってロシアから齎らされたロシア正教の種は，山中友伯や小松韜蔵等によって秋田地方に運ばれ，目時金吾，千葉佐惚治，浅井小魚，高木新助等の内部において「造り變へ」られて，発芽し，やがて新しい自己表現を取って，教育，俳諧，地方史研究等の土壌に花を開いていった。これらの活動は，もし彼等にロシア正教の信仰がなかったならば，おそらく，もっと違ったものになっていたことだろう。あるいは，成立し得ていなかったかもしれない。

無論，過去の歴史に対してこのような仮定を行なうことは，それ自体が既に無意味なことであろう。しかし，心の内部に燃える信念や信仰は，必ず外部へと現象して来ざるを得ないものである。その時，もし「造り變へる力」が働いていたならば（そしてこの力は，その人物が知性的に優れていればいるほど，強く働くであろうから），必ずそこに独自の形態を取って，新しい文化が「働き」として現象して来るはずである。その「働き」が子弟の教育であったり，俳句の吟詠であったり，あるいは，郷土史の発掘であったりしたとしても何ら不思議はないのではなかろうか。

Akita University

カントは「宗教とは（主観的に見れば）我々のすべての義務を神からの命令として認識することである」と言う。また「ある宗教の根本命題を採用することは，優れた意味において信仰（fides sacra）と呼ばれる」とも語っている(39)。実際，浅井末吉にとっては鍛冶業ですら神から与えられた天職であったことだろう。

確かに，彼等は内村鑑三のように「無教會」という日本に特有な新しいキリスト教を形成したわけではない。しかし彼等は彼等なりにロシア正教の信仰を，自らが生きた地域の風土に同化させて土着化し（造り變へて），更にそれらを新しい文化の形に表現していったものと考えてよいのではなかろうか。このような解釈を「秋田地方におけるロシア正教の展開」に関する一つの「解釈」として提案して，今後の活発な議論の発展を期待したい。

お わ り に

文化形成の歴史を考察する場合，決してそれとは判らなくても，それが成立した背景を深く探っていくと，その根底に一定の信仰が形成力として働いていたといったような場合は決して少なくない。眼に見える「客観的な実在」ばかりに捉われ過ぎて，「棄教」だの「離教」だのと，あるいは，「衰退」だの「敗北」だのと議論する前に，たとえ眼には見えなくとも，そこに生きて働いていた「倫理的な実在」の確かな存在を見落とすことのないよう注意すべきであろう。

内村鑑三もまた，誰もが出来る「後世への最大遺物」は，決してその人が遺した金や事業や文学の如き客観的な実在としての遺物ではなく（無論，それらは大遺物ではあるが決して最大遺物ではなく），その人自身が「真面目なる生涯を送った」ということにあると言う。

内村は先ず「後世に残す最大遺物とは何か」と問い，次のように答える。

金も事業も文学も大遺物には相違ないが，決して最大遺物ではない。その「訳は一つは誰にも真似する事の出来ない遺物であるから」であり，「夫ればかりで無く其結果は必ずしも害のない結果ではない」からである。

「そんならば最大遺物は何であるか」。「人間が後世にのこす事の出来る，サウして是は誰にも出来るところの遺物で利益ばかりあつて害のない遺物がある」。それが「何であるか」ならば，それは「勇ましい高尚なる生涯だと思います」。すなわち，「此世の中は悲みの世の中でなくして，喜びの世の中であるといふことを我々の生涯に実行して其生涯を世の中の贈物として此世を去るといふことであります。其遺物は誰にでも出来る遺物ではないかと思ふ」。

このように語った後，内村は次の言葉をもってこの演説を締め括っている。

「我々をして世の中に何も遺すことなくとも，我々に世の中に是ぞと云ふて一つの覚えられることがなくとも，アノ人は此世の中に活きて居る間，真面目なる生涯を送つたと云ふことを後世の人に遺したいと思ひます」(40)。

筆者の言うこの「倫理的な実在」としての生涯こそが，まさに内村的キリスト教信仰の神髄であった。

従って，更に言えるならば，目時金吾，千葉佐惣治，浅井末吉その他の逸材が，この時代のこの地方に生きて活躍していたということ，そのこと自体が既にここに土着して根付いたロシア正教信仰の自己表現そのものであったと言えるのではなかろうか。あるいは，こうも言えよう，彼等の生涯そのものこそが，まさにロシア正教信仰の何であるかを，あるいは，何であるべきかを映し出す「イコン」そのものであった，と。

筆者は既に拙論「異宗教文化との出会い」において，日本ハリストス正教が敗戦後，急激に凋落した原因は，その布教・伝道の基盤を支えていた戦前の強力な①天皇制国家と②家父長的家族制度とが敗戦によって崩壊したことによると指摘した(41)。しかし今は更にこれに加えてもう一つの理由が指摘されてよいのではないかと考える。「倫理的な実在」ということ自体が，残念なことに「継承」の観念を欠いているということである。

「客観的な実在」すなわち教会堂，組織制度，集会規則等々は確かに継承され，発展せしめられることが比較的可能であり，また容易でもある。しかし，「倫理的な実在」すなわち信徒としての生き方や生涯，更には文化的な活動それ自体等々は，すなわち，内村の言う「勇ましい高尚なる生涯」そのものは，たとえ模倣されるとしても，そのままそっくり継承されることはまずあり得ない。ましてやこれを継承して更に発展させるなどということは先ず不可能であろう。全く個人の人格的な有りようや生きざまに依存している事柄だからである。従って彼と同じように個性的な人物，もしくは彼以上に優れた人物が輩出しない限り，どのように優れた信仰活動も，つまるところは継承されたり発展せしめられたりしてはいかないのである。

もっとも，司馬遼太郎によって「秋田県は人間の秩序感覚に折り目があって，上下の礼儀や主客の折り筋がきっちりしている」(42)と評されている秋田県人であるから，今後，これらの先人達の偉功を継承して，これを発展せしめる如き逸材が輩出する期待は充分に持つことが出来るだろう。

とまれ，大湯地方のハリストス正教が急速に教線を伸ばしながら，また「客観的な実在」としては急激に減少していったという事実は，まさにこの信仰の現象形態そのものが継承性を欠いていたという理由によるものでは

Akita University

あるまいか。

事実，秋田県では，明治25(1892)年に，畠山市之助等の努力によって現大館市の曲田地区に福音聖堂を建立することが出来た北鹿地方のハリストス正教だけが，戦後の「公會議事録」に僅かながらもその現員と戸数とを記録することが出来ているのである（上掲の統計表を参照)。畠山氏の功績はこの聖堂が存続する限り忘れ去られることはないだろう。これもまた一つの（決して唯一のではないが)「偉大さ」ではある。

なお，大館地方へのハリストス正教の「流入」については『大館市史』に次のような記述がある。

「大館地方へは鹿角からの流入と考えられるが，ハリストス正教（別名ギリシャ正教）本会副伝教者アレキセイ山中は明治一〇年に北鹿地方で布教を行ったという記録がある。曲田の豪農畠山市之助（洗礼名約翰(ヨハネ)）と赤平操（洗礼名保羅(パウロ)・明治一三年，大館で最初に牛乳屋を開業した）らが信徒の最初で，畠山の洗礼は明治一八年。」とある(43)。

一方，『秋田人名大事典』では，「畠山市之助（弘化3年2月19日～大正4年4月14日)，大館市曲田の生まれ。家は曲田の地主で畠山氏の本家。明治十年にギリシャ正教の東京本会から派遣された伝道教師山中祐博によってギリシャ正教に帰依し，洗礼名約翰(ヨハネ)。」と記載されていて，畠山氏の受洗は明治十年であるかのような記述になっている(44)。

他方，曲田会堂内に用意されている「宗教法人『北鹿ハリストス正教会』曲田生神女福音会堂」によると「曲田村では畠山市之助が山中祐伯から正教を学び，明治12年4月，最初に洗礼を受け，熱心な信徒となる。」となっている。

このように，畠山市之助氏の受洗の時期については諸説があって，一概に「いつ」とは定め難いようである。

しかし，曲田の生神女福音聖堂の建立に関しては，ほとんど多くの資料が，表現上の違いこそあれ，内容的には一致している。すなわち，これは「明治25(1892)年：曲田の豪農畠山市之助が私財を投じて信徒とともに屋敷内に建築した曲田福音聖堂」である（秋田県教育委員会と大館市教育委員会とが連名で立てた聖堂前の立て看板の説明文，その他多数)。設計は東京の日本ハリストス正教会復活大聖堂（所謂ニコライ堂）の工事関係者と伝えられる(45)。

内海健寿氏は，この間の事情を更に詳細に伝えている。それによると，曲田福音聖堂は，明治25年7月，大館の伝教者アウラアム八木精治とともに，曲田の豪農畠山市之助が私財を投じ，パウェル佐々木貞吉（中山)，パウェル赤平操（十二所）らと相談して，自己所有の山の杉の良材をもって新築したものという。聖堂の建設は，たいてい有志の寄付で行われるが，豪農の畠山は他者の援助を待たず貴重な私有財産を投下して神のため，公衆のために喜捨した。工事は三ヵ月で完成したという(46)。

このビザンチン様式の教会堂建築は昭和41年3月22日に秋田県指定有形文化財（建造物）に指定された。所在地は「大館市字曲田80番地」，所有者は「宗教法人　北鹿ハリストス正教会」である。

なお，これらの諸資料にしばしば登場する「パウェル赤平操」の生涯については，明治13年に大館で最初に牛乳屋を開業したということ以外，ほとんど何も伝えられておらず，また「パウェル佐々木貞吉」についても，その詳細は全く不明である。今後の調査と研究に期待する他はない。

とまれ，筆者は，芥川龍之介の「造り變へる力」というキーワードに教えられて，一地方的ながら，新しく日本ハリストス正教の急激な進展と衰退の原因を探ってみた。しかしそれは決して衰退でもなければ消失でもなかった。むしろ，優れた個人の内部において新しく「造り變へ」られた信仰が「倫理的な実在」として，文化遺産となり，やがて豊かに自己を表現し得たことを，ほんの少しではあったが，改めて確認することが出来たのである。

しかし，このような「倫理的な実在」を出来るだけ多く「発掘」し，「確認」して，我々自身の自己のうちに「継承」し，「発展」させていくことこそが，これからの我々の最も大切な課題であり使命となるのではなかろうか。

［追記］本稿を草するに当たっては，鹿角市の末広小学校長望月伸哉氏（現，北教育事務所鹿角出張所長）から特に地方的な資料の蒐集などに多大なご尽力を頂戴した。氏のご尽力がなければ，本小論は決してこの世に生まれ出ることはなかったろう。ここに記して謝意を表したい。

［註］

(1) 芥川龍之介著『神神の微笑』(『芥川龍之介全集第五巻』)，岩波書店，1977年，173～192頁。

(2) 武藤鉄城著『秋田切支丹研究』，昭和55年，翠楊社，174～ 177頁。

(3) 本文中に見られるように，これは無論，昭和8年頃の「現主」である。

なお，「雲沢村」は昭和30(1955)年に中川村，白岩村と共に角館町と合併して角館町になっている。従って，本文中の「下延」は現在の「角館町下延」のことであろう。

また，「横沢村」は現在の「太田町横沢」のことで，ここには六郷町と角館町とを結ぶ街道が通っている。（日本

Akita University

歴史地名大系第五巻『秋田県の地名』，平凡社，1980年，「角館町」及び「太田町」の項を参照)。

(4) 前掲書，174～177頁。

(5) イコンの美術史的意義やキリスト教史的意義については拙稿「イコンの美術史的意義」(秋田大学教育学部研究紀要第53集，平成10年3月）及び「イコンのキリスト教史的意義」(秋田大学教育文化学部研究紀要第54集，平成11年3月）等を参照。

(6)，(7)，(8) 武藤鉄城著，前掲書，174頁。事実，平成7年11月，秋田県鷹巣町の民家（中島忠輝氏）の土蔵からイコンが発見されたが，このイコンには合金カバーがかけられていた。額縁に記された覚書によると，ニコライ師が直弟子であった元仙台藩士の大和田敬時に贈ったものという。敬時の次女テル（忠輝氏の母親）が中島家に嫁ぐ時，父親から手渡されたものと見られている。(拙稿「日本におけるハリストス正教会の展開」，『日本プロテスタント史研究会報告』，第62号，1996年，参照)。

(9) ここまでの「イコンの画法，素材，主題，特徴」等に関する記述は，主として次の書物によった。ミシェル・クノー著／高野禎子訳『魂にふれるイコン　絶対者に向けて開かれた窓』，せりか書房，1995年，103～107頁。

(10) 伊多波英夫著『銀月・有美と周辺　明治・大正秋田文壇人物誌』，秋田近代文芸史研究会，昭和54年，49頁。

なお，伊多波氏は続けて，「その翌年（明治17年）の五月には，プロテスタント派の宣教師であるチャールズ・ガルストが，スミス夫人とともに帆船吉野丸で土崎に上陸，秋田を拠点として本荘，酒田，鶴岡，新庄方面にかけて布教活動を開始した」と語り，更にこのガルストから明治二十年には青柳有美と川井運吉とが一緒に洗礼を受けたことを伝えた後，「また別の記録によれば，運吉はガルストが明治十七年に秋田に来たその年の十月に受浸ともある。それに従えば，秋田人の受浸第一号はガルストの召使夫婦，そしてギリシャ正教の信者だった松田某と仏教徒の松村某に次いで運吉は五番目だが，ここは本人の記録による」と追記している（前掲書，174頁)。

この「別の記録」が何であるのか，また，松田某がどのような人物なのか，少し調べてみてが判明し得なかった。どなたかからのご教示を願っておく。

無論，ここに登場するガルストというのはディサイプルス派の宣教師として来日した Charles Elias Garst (1853～1898) のことである。ガルストは日本の貧困を解決する途は「土地単税」制の実施より他にないと考え，自らも「単税太郎」と名乗り，宣教の傍ら，単税論を広めるために活躍して日本のキリスト教社会運動史にその名を留めた特異な宣教師である。

このガルスト夫妻の秋田における活躍については工藤英一著『単税太郎C．E．ガルスト』(聖学院大学出版会，1996年）が次のように伝えている。

ガルスト夫妻はスミス夫妻と共に明治16(1883)年10月，横浜に到着した。翌年春までここに留まって日本語を学び，その後秋田に赴いた（伊多波氏が，明治17年5月に「帆船吉野丸で土崎に上陸」したと語るのはこの時のことであろう)。秋田に牧すること四年，明治20(1887)年春には秋田に教会の組織が成った。集会は聖日には礼拝と日曜学校，木曜には午後婦人，夜男子の聖書研究会が行なわれた。第三日曜の礼拝は本荘で行い，秋田から18マイルの老方（東由利町）で6回の説教を行なった。そこでは70世帯の仏教徒が求道したという。これらの集会の出席者は平均50名ほどであった。同時にマルコ伝，ルカ伝を主とした聖書の販売やトラクト（Tract）の頒布を行なっている。また伝道旅行にもしばしば出ている。

この時期に，すなわち，明治18(1885)年の3月に，スミス（Josephin Wood Smith）夫人が死ぬ。秋田に設立された教会堂は，この故スミス夫人の記念のためのものである。

ガルストは秋田において伝道集会と同時に，貧しい人や病人の救済も行なっている。夫人の著書には，①10人の家族を抱え，しかも妻が病気である月収2ドルの織工の話や，②病人に湯をつかわせるためにこれを持ち運んだ話などが出てくるという。ガルストが心を強く痛めたのは日本人の道徳心の低さと同時にこのような貧困の問題であった。

明治20年には秋田から羽前鶴岡に移ったが，帰米中に単税論に関心を寄せ（特に日本の農民の貧困に特別の関心を寄せ)，明治30年には社会問題研究会の設立にも名を連ね，その重要なメンバーの一人としても活躍した。

明治31年に45歳という若さで築地に永眠する。

ガルストは青山墓地に，フルベッキの墓の直ぐ傍らに眠っている。

(11) 拙稿「ニコライの日本語教師 ── 木村謙齋 ── 」(秋田大学教育文化学部研究紀要第57集，平成14年3月)。

(12) 田山久著『花矢大館地方史』，花矢町教育委員会，昭和42年。

(13) 『秋田県の文化財』，秋田県教育委員会，平成元年，345頁。また①「大館市曲田村にハリストス正教会を伝えたのは山中祐伯」であり「彼は明治10年10月函館正教会から遣わされた伝道者として，隣の十二所村を訪れた」(宗教法人「北鹿ハリストス正教会」曲田生神女福音会堂（曲田会堂内に用意されているパンフレット)，②「明治十年ころ，秋田県北地方にハリストス正教を伝道したのはアレキセイ山中であった」(内海健寿「明治前期秋田県北におけるハリストス正教の受容」，『福島正教』129号）等の記述も見られる。更に『大館市史　第三巻　上』，大館市史編さん委員会，昭和五十八年，242頁等も参照。

(14) 『日本キリスト教歴史大事典』，日本キリスト教歴史大

Akita University

事典編集委員会，教文館，1988年。

(15) 『日本正教傳道誌』巻之貳，日本正教會編輯局發兌，編纂兼發行者　石川喜三郎，明治三十四年，15～16頁。

(16) 『七一雑報　第3巻』，不二出版，1988年。172頁。

なお，ギリシア教の伝播に関しては明治18(1885)年2月の『六号雑誌』5巻51号に，「希臘教論　第1回」と題された次の記事が掲載されている。

「希臘教我國ニ傳播スルヤ久シ其信徒已ニ万餘ニ充テリ将来我國ニ於テ幾分カノ勢力ヲ有スヘキヤ疑フ可ラス其教ノ正邪眞偽豈ニ攻究セズシテ可ナランヤ近頃京都同志社神學博士デビス氏其生徒ノ為メ比較神學ノ講義ヲ為ス其講義中希臘教ノ謬ヲ正スノ條アリ其論簡ニシテ明ナリ宗教者ノ學フベキ所多シ。」(『明治前期学術雑誌論文記事集成』，第6巻，宗教，倫理(3)，1989年，株式会社ゆまに書房，177頁)。

従って，既に明治10年代の後半には，ギリシア正教会は「全国的にも」キリスト教の他の宗派を圧するような（それ故，他宗派にとっては）侮り難い発展を遂げていたことが窺えるのである。禁教令が撤廃された明治6年から僅か十数年後のことであった。

(17) 『日本キリスト教歴史大事典』，前掲書，538頁。

(18) 『日本正教傳道誌』巻之貳，前掲書，25頁。

(19) 『大館市史』，前掲書，242頁。また鹿角のあゆみ編集委員会編集『鹿角のあゆみ』，「鹿角のあゆみ」刊行会，昭和44年，114頁等も参照。

(20) 『秋田人名大事典』，秋田魁新報社，平成12年。537頁。

(21) 『日本キリスト教歴史大事典』，前掲書，1396頁。

(22) 同書（内海健寿），865頁。

この頃の鹿角地方の状況を『鹿角のあゆみ』（前掲書）は次のように伝えている。

「七滝にロシア人宣教師が来ていたのは何年の頃か明らかでないが，特に注目されることは，ニコライ主教の大湯来訪と，同じく大湯における仏基大論争（後述）である。東京のニコライ主教が，この北隅の寒村大湯を訪れたのは明治二十四，五年頃（諏訪綱俊談）で，当時村人たちは「カラヒト（唐人）がくる」というので，説教所のあった大円寺門前あたりへ，好奇の目で見物に集まったというが，主教を招いてまで信仰を深めようと努めた信者の熱烈さがうかがい知れる」(同書，114～115頁)。

安村二郎氏も同様の出来事をもっと簡潔に伝えている。

「かつて諏訪滴俊翁（元大湯町長）からお聞きしたところでは，二十四，五年ころ，東京からニコライ主教がやってきた。冬の寒い日で，唐人を見ようと黒山の人だかりができたという」(安村二郎「鹿角のギリシャ正教㊦」，「秋田さきがけ」昭和45年12月1日火曜日（4），夕刊)。

しかし，中村健之介著『宣教師ニコライと明治日本』(岩波新書，1996年，48頁）によると，ニコライが一八九三（明治二六）年の五月に，東北地方巡回の旅で大館に立ち寄ったことが，ニコライの同年五月二十二日の日記からわかるという。(拙稿「ニコライの日本語教師 ── 木村謙齋 ──」(秋田大学教育文化学部研究紀要，人文科学・社会科学第57集，平成14年）を参照)。

従って，諏訪氏の記憶されていた，ニコライの大湯来訪の年が「二十四，五年頃」というのは，このニコライが大館を来訪したのと同じ年の，すなわち，明治二十六年の冬だったのではなかろうか。その当時，多忙を極めていたニコライが二ケ年間にもわたって秋田地方に滞在していたとは考え難いことである。

(23) 以下の千葉佐惚治に関する叙述は，①『秋田人名大事典』，前掲書，383～384頁及び②『日本キリスト教歴史大事典』の865頁における内海健寿氏の記述による。

(24) 『大湯の歴史（其の一)』，諏訪富多著，大湯郷土研究会代表・編者兼発行者，諏訪富多，昭和四十七年，29～30頁。

ここの諏訪富多氏の記述では佐惚治の年令が「二十歳」になっているが，これは「数え年」によったものであろう。

なお，『鹿角のあゆみ』，前掲書は，「明治十一年ヨリハリストス正教ノ教理ヲ聴聞セリ」，「明治十三年五月ハリストス正教ヲ信ジ川股篤禮司祭ヨリ領洗セリ」という千葉佐惚治の履歴書を紹介し，更に「例えば，十二所曲田に信仰が入り福音聖堂（ハリストス正教）の建立されたのが明治二十五年であるのに較べてみても，その早さが知られる」と付記している。また，目時金吾の信仰を受け継いで広めていった人として，大湯の千葉佐惚治の他に「花輪の小田島庄太郎」の名を挙げているが，この人物の詳細は不明である(114頁)。

(25) 同書，同頁。

(26) ①坂田佑著『恩寵の生涯』，待晨堂，昭和41年，また②『大湯の歴史（其の一)』，前掲書，45～47頁，③『十和田町の先輩』，秋田県十和田町役場経営企画室，昭和四十七年，57～58頁等を参照。

なお，「秋田さきがけ」昭和45年2月21日の「秋田の人物」欄に，高橋克三氏によって「坂田祐」の生涯をコンパクトに纏められた紹介文が掲載されていて参考にすることができる。

(27) 浅井小魚に関する資料は主として『鹿角のあゆみ』，前掲書，209～210頁の記述に依ったが，なお①『日本キリスト教歴史大事典』の37頁における内海健寿氏の紹介文や，②『秋田人名大事典』，前掲書，11頁や，③『十和田町の先輩』，前掲書，60頁や，④『大湯の歴史　(其の一)』，前掲書，42頁，及び⑤成田健著『文人たちの十和田湖』，無明舎，2001年，16～25頁，更に⑥村山古郷著『大正俳壇史』，角川書店，昭和六十一年，11～19頁等の記述をも参考にした。

(28) 『(復刻版）秋田県史　五巻』，秋田県，昭和52年，1077

Akita University

頁。

(29) 同書，同頁。

(30) 『十和田町の先輩』，前掲書，63～64頁。

(31) 『鹿角のあゆみ』，前掲書，115頁。

(32) 武藤鉄城著『秋田切支丹研究』，前掲書，53～56頁及び137～140頁参照。なお同じ頁（56頁）に「鈴木廉治郎」と「鈴木廉次郎」の表記が見えるが，前後の関係から見て，明らかに同一人物と考えられる。しかし今はこれを正す資料も見当らないので，原文のままにしておくことにし，後日の検討課題としたい。

なお『秋田県史　第六巻　大正 昭和編』，昭和五十二年，903頁には，「武藤鉄城編，秋田切支丹年譜」に基づいた上記と同様の角館事件が記録されているが，目新しい記述は何もない。

(33) 同書，57頁及び140～141頁。

(34) 『鹿角のあゆみ』，前掲書，115頁。

なお，大内青巒及び井上円了の宗教観については『明治思想家の宗教観』（比較思想史研究会編著，大蔵出版株式会社，昭和50年）の132～178頁に，峰島旭雄氏による「第二節　佛教即宗教の宗教観 ── 大内青巒 ── 」及び「第三節　現象即実在論の宗教観 ── 井上円了 ── 」と題されたかなり詳細な考察があり，二人の宗教観を知ることが出来る。

(35) 安村二郎「鹿角のギリシャ正教㊦」（「秋田さきがけ」昭和45年12月１日，火曜日，(4)，夕刊，秋田魁新報社）。

(36) 拙稿「異宗教文化との出会い ── 日本正教会の場合 ── 」（比較思想学会『比較思想研究』，第24号，別冊，1998年，24～28頁）。

(37) トク・ベルツ編，菅沼龍太郎訳『ベルツの日記』，岩波文庫，1951年，49～53頁。

(38) 内村鑑三著『日本国の大困難』（明治36年３月10日『聖書之研究』35号「講演」。『内村鑑三全集　11』，岩波書店），1981年，147～156頁。

(39) "Religion ist (subjektiv betrachtet) die Erkenntnis aller unserer Pflichten als göttliche Gebote."(Immanuel Kant : Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft ; Philosophische Bibliothek, FELIX MEINER VERLAG, HUMBURG, 1956, S.170.)

"Die Annehmung der Grundsätze einer Religion heißt vorzüglicherweise der Glaube (**fides sacra**)." (Op. cit., S.182.)

(40) 内村鑑三著『夏期演説　後世への最大遺物』（明治30年７月15日，単行本。『内村鑑三全集　４』，岩波書店），1981年，250～292頁。

(41) 拙稿「異宗教文化との出会い ── 日本正教会の場合 ── 」，前掲書，参照。

(42) 司馬遼太郎著『秋田県散歩，飛騨紀行　街道をゆく　29』，朝日文庫，1999年，57頁。

(43) 『大館市史　第三巻　上』，（８．キリスト教の伝来），編集者：大館市史編さん委員会，発行者：大館市，昭和五十八年，242頁。

(44) 『秋田人名大事典』，編・発行：秋田魁新報社，平成12年。

(45) 秋田県教育委員会『秋田県の文化財』，平成元年３月，345頁，その他。

(46) 内海健寿著「秋田県北鹿角におけるハリストス正教」：『福島正教』，125号，および，同「明治前期秋田県北におけるハリストス正教の受容」：『福島正教』，129号，その他。

(H.14.10.5.AKT.)